

- 1 派遣期日 平成27年10月 13日 (火)
- 2 研修先 学校名 埼玉大学教育学部附属小学校  
所在地 〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤6丁目9番44号  
<http://www.fusyo.saitama-u.ac.jp>

### 3 研修内容

#### (1) 研究主題について

視察校では、『学びの本質』を育む授業の創造を研究主題に、「思考力・判断力・表現力の育成とその評価」を副題に設定し、研究を進めていた。学びの本質とは、「全教科に共通の学力」とも言い換えられ、特に思考力・判断力・表現力における共通の学力に焦点を当て、その育成と評価についての研究に、全校を挙げて取り組んでいた。目指す児童像は「問題解決の過程で、多様な考えを生み出して、明確な根拠をもって考えを絞り込んでいる姿」であり、国語科で目指す児童像は「課題解決型の読解力・表現力を身に付けた児童」と定義づけられていた。

#### (2) 教科等部会（国語）の取り組みについて

##### ① 主な実践

##### ・課題解決型の読解力を身に付けるための指導例（6年）

課題に対する自分の考えをもつことができるようにするために、文章中の課題解決に必要な叙述に着目させる摘読の仕方を指導する。摘読は、文全体を概観しながら拾い読みをすることである。具体的には、各登場人物に関係する叙述や作者の考えごとに色分けして線を引かせたり、考えたことを付箋に書かせたりする活動を通じて行う。また、交流でイメージマップ形式のワークシートを活用することを通じて思考の可視化・再構築を行う中で、読解力を身に付けていく。

##### ・課題解決型の表現力を身に付けるための指導例（2年）

内容のまとめりごとに順序よく書いた文のよさを児童に実感させるため、モデル文を掲示し、比較する活動を取り入れる。見たこと、聞いたことなどの観察方法のまとめりごとに、観察したことを付箋で色分けして書かせ、清書時に文章を再構築する際の支援とする。交流時は、付箋と本文を比較させ、観察方法のまとめりごとに、順序よく書けているかを視点に読み合い、より高度な表現力の育成を目指す。

##### ② 公開授業を参観して

・1年生「しょうかいします この一さつ」では、共通教材「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の学習を通して叙述をもとに想像を広げ、登場人物や話の展開など、物語の基本的な構成要素から好きなところを見つけるよう指導していた。大きめの付箋に好きなところを書かせ、読みの観点ごとに教師がグループ化することで、複数の読みの観点から好きなところを見付けられたかの確認ができていた。また、全体発表の際に、実物投影機を使い、児童の書いた文章を拡大していたのは有効な手立てと感じた。また、全校統一で単元全体の見通しをもてる掲示物があり、児童が単元を貫く言語活動や並行読書についての知識を自然に得られる環境作りがなされていた。（資料1）

・3年生「ぼくの読み方 きみの読み方」では、新学習指導要領の「読むこと」から特に「文章を読んで考えた

ことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」を重点に指導していた。教材「ちいちゃんのかげおくり」の学習において、児童は一番心を打たれた場面を理由付けしながら選び、グループの友達と感じ方の共通点や相違点を見付ける授業だった。児童は心を打たれた場面を付箋に書き、それを感動が大きい順に並べて貼ったワークシートをもとに、選んだ理由を話し合い、貼る位置を替えながら活発に交流していた。どのグループも自分の意見を分かりやすく発表し、交流により自分自身の考えを深め、最終的な自分の考えをまとめることができていた。掲示資料として、「感じたことを表す言葉の一覧表」（資料2）があり、悲しい、ほっとする、つらいなど感じたことを適切な言葉で表現できるような支援がなされていたのも参考になった。板書も資料が構成的に貼られ、児童の思考が再構築されやすい工夫がなされていた。（資料3）



（資料1）



（資料2）



（資料3）

### （3）研究の成果と課題

- ① 研究主題を達成するために、各教科部会が個々の研究主題を設定し、教科担任制を取り入れるなどして、系統だった授業を展開している様子が参観できた。今後自校においてどのように学校課題研究を研究・実践すればよいかを掴むことができた。本校では、環境、授業の展開の仕方、教具などは統一してきたが、主題達成のための手立ての絞り込み等がまだ不十分であり、系統立てた研修の時間を確保したり、各部会の位置づけや役割分担をしっかりと行ったりする必要があると感じた。
- ② 国語の授業では、付箋を使った交流活動や並行読書が積極的に行われていたが、参観した授業では、どの学年も展開が似ており、交流活動を通じて児童の意見の再構築を図るものだった。流れを統一することはよいが、授業の仕方にもっと各教員独自の工夫や、児童の個性を生かした授業展開があってもよいのではと感じた。教員である私たちそれぞれが、各自授業力向上のために研修の時間を確保し、学年の発達段階や、児童の個性に対応した楽しい授業を創造することが大切である。

### 4 感想

埼玉大付属小は、地元での評判も高く、地域発展の一翼を担っている学校である。そのような背景もあり、国語の授業ひとつとっても、2名の教科担任が責任を持ち、低学年から根拠をもとに自分の考えを話したり、文章を書いたり、物怖じせず意見を発表したりする児童を学校全体として授業で育てようとする姿勢が印象に残った。これまで、あるべき児童像を目指して授業をするという意識が薄かったが、今後は、本校の目指す「伝え合う力」を身に付けた児童像を意識して、より具体的に系統だった研究の骨子を再検討し、次年度の研究に繋げて行ければと考える。

参観して改めて感じたのは、毎日の授業の大切さと、それを通じて築かれる信頼の重要性である。学校全体の児童を伸ばさせるために授業の技術をより一層向上させる研究を進めるとともに、学級の児童との人間関係にも絶えず気を配ることで、お互いに大きな信頼を得られる一年にしたいと思う。